

Title	『源氏物語』正篇における異界の力
Author(s)	藤井, 由紀子
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44130
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	藤井由紀子
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第17460号
学位授与年月日	平成15年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	『源氏物語』正篇における異界の力
論文審査委員	(主査) 教授 伊井 春樹 (副査) 教授 後藤 昭雄 助教授 荒木 浩

論文内容の要旨

本論文は、『源氏物語』に描かれた、「物の怪」「夢」「もののさとし」「神」などといった、いわゆる〈異界〉にかかわる事象を考察し、物語におけるその表象の位相あるいは機能などを明らかにすることによって、作品の論理や構造を照射しようとした内容である。全体は三編各三章で構成されており、400字詰原稿用紙にするとおよそ430枚ばかりとなる。

第一編「『物の怪』と『夢』」は、第一章「物の怪とはなにか—『源氏物語』の物の怪論のための」、第二章「『夢』と『物の怪』—六条御息所の死霊をめぐる」、第三章「柏木の猫の夢」からなり、〈異界〉を考察する上で不可欠な「物の怪」と「夢」について考察する。『源氏物語』にしばしば「物の怪」が登場するが、従来その性格の認定は曖昧で、狐、木霊、鬼等とも混同する。諸事例の分析によって、「物の怪」は病と不可分であり、病によって実態が確認されるとし、妖怪変化の類は「物の怪」の正体ではあっても「物の怪」そのものではないなどとする。死者が出現する回路としては「夢」が存しており、「夢」に出現することと、「物の怪」になることとの峻別をし、それぞれの性格の違いを述べる。さらに柏木と女三宮との出会いにおける猫の夢について、懐妊説を批判し、「モノの授受」が懐妊を意味するとし、夢に対する柏木の姿勢とその後の運命について論じていく。

第二編「須磨・明石巻の構造」は、第一章「御陵の桐壺帝」、第二章「須磨の暴風雨—『源氏物語』における神々の諸相」、第三章「『もののさとし』の機能」からなり、従来の王権論では須磨・明石の両巻を、王者の〈死と再生〉の過程として捉えていた考えに反論し、新しい視点から読み直しをはかる。その作業として、さまざまな事象が〈異界の力〉によって動かされるとし、その意義と物語の構造とを解明していく。御陵に出現する桐壺院の「面影」は、光源氏の救済ではなく、むしろ彼を皇統譜を乱す反逆者としての烙印の意味があったとし、須磨の暴風雨には荒ぶる「八百万の神」と、鎮める「住吉の神」との二種の存在を指摘する。さらに都での「もののさとし」は、結果として旧右大臣一族を排斥し、逆に秋好中宮と明石中宮を浮かび上がらせる機能を有するという。

第三編「『静かなる』六条院」は、第一章「准太上天皇とはなにか—藤裏葉巻の栄華の実相」、第二章「六条院崩壊の論理—若菜巻における」、第三章「六条御息所の鎮魂—鈴虫巻の六条院の位相」からなり、藤裏葉巻での栄華の実相は、光源氏出家願望による「静かなる」六条院が意図されており、それは嵯峨の御堂を継承する内容であったとする。さらにその栄華が崩壊していく若菜巻の論理を探っていく。「静かなる」六条院をめざしながら、それを放棄したところに、光源氏の錯誤があり、ひいては六条院の崩壊へとつながったという。鎮魂の場として構築された六条

院でありながら、その機能を失ったため、六条御息所の鎮魂は新たに「静かなる」場として設けられた仙洞御所がその役割を持ち、「物の怪」としての御息所は退場することになるとする。

論文審査の結果の要旨

本論文は緊密に構成されており、「異界の力」をテーマにしてさまざまな新しい作品の読みと解釈を意欲的に提示し、旧来の定説の変更を果敢に迫ろうとする。死後も物語に登場する人物は7人存し、六条御息所以外はすべて子供の不遇な現状を打開するためであり、その満たされない思いを本人や後見人たちに伝えるのを目的としていたとする。それによって御息所の「物の怪」の特異性を浮き彫りにし、紫上と女三宮への憑依は、二人を光源氏から遠ざけるのが目的であったという。また、柏木が女三宮のもとで見た猫を手渡す夢は、猫の夢が即懐妊を意味するのではなく、「モノ」を相手に託すことが懐妊につながるとし、さまざまな資料を用いて傍証する。光源氏や明石入道は夢を信じ、その実現に向けて行動したのに対し、柏木は夢を懐疑的にとらえ、むしろ消極的なふるまいをしたため、結果として身の破滅に結びついたとする読みを明らかにする。

王には、私的な「自然的身体」と公的な「政治的身体」とを持つとの理論のもとに、御陵での桐壺院の出現は、須磨の夢の出現とは異なって公的な姿であり、従来定説化していた光源氏への救済ではなく、反逆者としての断罪のためであったとする。逆に、須磨巻での朱雀院への夢による桐壺院の出現は、子を思う私的な叱責であったとし、興味深い説ではあるが、やや図式化した論理になりかねない。第二編の須磨での暴風雨の猛威の、二種の神による働きは、都での「もののさとし」の意味とともに妥当な論であり、第三編はとりわけ斬新な分析方法と論の展開をしており、これまでの王権論による解釈の修正もはかる必要があろう。光源氏の准太上天皇位は、自ら「静かなる」思いをかなえるためであったこと、「乱れ」を属性として持つ女三宮を迎え入れることによって六条院の崩壊が結果として生じたこと、六条御息所の鎮魂の場が六条院ではあり得なくなったことなど、すぐれた論理展開をしていく。

『源氏物語』の本文を詳細に分析し、自己の新しい論を構築して提唱するなど、きわめて説得力もありはするが、また別の論も成り立ち得るし、やや形式的な構造論になりかねない点も存する。ただ、研究世界に大いに裨益する力作だけに、本論文を博士（文学）の学位にふさわしい内容であると認定する。